

再読・倉橋惣三



最終回

倉橋惣三の「子どもの生活」理解を探る

— 学校へ来る子どもの気持ち、先生の心掛け —

児玉衣子

昭和二年、『教育論叢』の特集「在学中における社会意識の養成について」において、倉橋惣三は「仲間とともにいるという子供の生活（註1）を」という論を寄せています。テーマに漂う課題意識に対して、倉橋は、課題以前の、仲間関係の喜びという人間の本質的喜びを述べます。本質的だからこそ、それが阻害されると生じる苦しみは大変なものであって、現在の虐待、いじめ、成人男性のすさまじい自殺数等々の大きな社会問題にも、この内容は深く結び付いてきます。そこで、最終回に倉橋のこの論を取り上げることになりました。

これから取り上げる三編とも『倉橋惣三選集』第五卷（フレーベル館）に入っていますが、まず右掲「仲間とともに……」の概略から紹介します。

学校へ来る子どもの気持ち

「子どもが学校へ来る時の心もちは何だろうか。青年が夜学へ行くような強い目的意識をもって通学するのでは決してない。先生に惹きつけられる、ブランコに誘われる等もあろうが、

最も主であるのは仲間のところに惹きつけられて行くのである。これは大人の場合でも人間の一つの大きな事実であつて、たとえ仕事に行くのであつても始終顔を見合せている仲間のところへということとは大きな要素になつてはいるはずである。子どもが学校へ行く時にもこれと同じ心の内容を認めなければならぬ。

そうすると学校は、第一に子どものこの要求を満足させ、同時に満足させることによつて助長させていかなければならない。学校は少なくともこの意味においてお互いが仲間となり合つて友達を迎えるところである。教師は学校の生活形式をこの意味で準備することが、第一の心掛けでなければならぬわけである。

子どもの中には、学校を誤つて考えたり、親たちの間違つた要求から、自分一人だけの完成を求める子どもが無いではない。いわゆる成績が良くても生活的意味において正しくない場合、その子どもは学校という子どもの社会における良き一員、良き生徒とはいえない。

こういうとすぐに協働、協力といった社会道徳を子どもに教えようと考える人がある。しかし、子どもが学校へ来る時の自然の要求そのものは、協力、協働の義務などを感じて来るのではない。ただ仲間のところへ共にいたくて来るのであり、交わりを求めて来るのである。もし、この淡くとも最も自然的な子どもの要求を、すぐに社会的目的意識等と考へて、可能な社会道徳の生活へ引きつけようとするなら、それは初めの自然な心をかへつて失わせる。今日の公民教育において特に注意すべき点であらう。

倉橋のこの主張は、保育においては彼の最初から当然の大事として唱え続けられており、現在も保育者の配慮の基本的事項になつています。^{注2}しかし、この論は、それが保育にとどま

らず学校教育においても引き続き人間形成の基本だと改めて気付かせるものです。そして、私たちに、仲間と共にいたいという本質的な要求を充たして（その中に対立、失敗、けんか、我慢、赦し^{ゆる}等も入って）得るところの充実感、何とはない幸せな感じの蓄積は、やがて、たとえ仲間への信頼を脅かされても喪失しない人間信頼感や自己肯定感、協力や協働への意志等に育っていくことへと思いをはせさせます。そして、このために大事なのは教師の心掛けになります。これについても倉橋は一貫した主張を展開しており、ここでは大正から昭和にかけての二つの論を見ましましょう。

先生の心掛け

まず大正十五年の「児童との人間味ある交渉を」^{注3}（『教育論叢』）と題する論では、倉橋は「教育をする者になり過ぎて人間味を失うな、つまりは、教授し訓練し取り締まることに慣れて子どもと共に生活する直接的な人間交渉の親しみを無くすな」と語りかけています。その際、フレibelやヘルバルトといった偉大な教育者を挙げて「彼らが、教育者としての経歴の始めに住み込み家庭教師になり、教育における子どもとの交わりの人間的な味わいをかみしめる経験をしたことが、教育に関する彼らの深い触れ方につながっているのではないか」と述べて、教育では理論構築すら、子どもとの人間的交わりによって形成された構築者の人間性が反映することを洞察しています。

昭和六年の「受け手としての教師」^{注4}（『児童教育』）という論になると、次のような指摘をしています。すなわち「教師は子どもへの与え手と思いがちだが、子どもの心を素直に受け

ることも負けず劣らず大切であり、また難しい。なぜ難しいのかというと、一、外向、内向等性格的なもの、二、教師という職業は批判力をもたねばならないが、それを適切に働かせる難しさ、三、旧教育の教師の直接干渉のみという教育方法から新教育の児童の自発活動重視へ、子ども個人々人への直接指導から学級経営による客観的指導へと変わったのはよいが、旧教育に存在した児童と教師との個別的交渉関係のもつ教育的本義まで希薄にしてしまった、等々の理由が考えられる……（以降の要約は、筆者の論点の都合により省略）。

このうち、注目したいのは三番目、すなわち新教育運動の代表的成果である子ども自発活動の重視、学級経営という客観性に富んだ子ども指導方法等も、無自覚に採用するだけなら弊害をもたらすという指摘です。その弊害とは、旧教育の有していた教師と生徒との強い結び付きによる「共に」という感覚の希薄化です。旧教育の教師の強い主導性と主観性とは、否定的側面としては押し付けがましさを、思い込み等を有しましたが、肯定的側面としては個人的人間的関係のもたらず信頼、愛着等の「共生」感覚の強いことがありました。新教育は旧教育の否定的側面を無くしたのはよいが肯定的側面までをも著しく貧弱にしてしまつたということです。

当時、学校教育はまだ絶対評価（児童の成長を各人の過程から評価）の時代でした。その中で子ども重視、客観性重視へと改革が行われたのですが、子どものために一見輝かしい成果ですら、形式を採用するだけなら必ずしも子どもにとって良くならないことを倉橋は明らかにするのです。そして戦後、保育でこそ絶対評価は維持されましたが、学校教育は相対評価（児童の成長を集団内の位置で表記）に切り替えられ、倉橋が案じた子どもの基本的欲求

への配慮は、いっそう薄れていかなかったでしょう。

ほとんどの人が戦後教育しか知らない今の時代、倉橋の提起した問題は、現在の重い社会問題を顧みる時、私たちが新しく知り、取り組むべき教育課題になっていないでしょうか。筆者がそう言い得るのは、現在でも保育者は誰でも幼子が人間的関係を求め、つくり出しているのに日々接し、保育者自身もそれによって育てられるのを実感しているからです。倉橋の提言は、いつの時代にも保育から学校教育へ一貫する大事な事柄をさりげなく、かつ切実に語りかけてきます。

(龍谷大学短期大学部)

注

- 1 倉橋惣三「仲間と俱に居るといふ子供の生活を」『教育論叢』第十八卷第四号(一九二七年十月) 文教書院 pp.111-114
- 2 倉橋惣三「保育入門」『婦人と子ども』第十四卷第五号(一九一四年五月) フレーベル会(幼児の教育復刻刊行会刊) pp.229-237。現在、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」領域「人間関係」等参照。
- 3 倉橋惣三「児童との人間味ある交渉を」『教育論叢』第十五卷第四号(一九二六年四月) 文教書院 pp.117-120
- 4 倉橋惣三「受け手としての教師」(『児童教育』第二十五卷第四号 一九三二年四月 宝文館) 『倉橋惣三選集』第五卷 フレーベル館 一九九六年 pp.331-339